

原爆写真展・被爆体験聞く会・平和のつどいを、クリニックで開催して

発表者 医師 大場敏明 (埼玉協会・クリニックふれあい早稲田院長)

クリニックを開いて11年がすぎた。開業3年目から毎年八月に「原爆写真展」を、翌年からは「被爆者の体験を聞く会」と、「核廃絶」をめざす地域での小運動を創ってきた。

「核兵器のない平和な世界」は、唯一の被爆国日本の、そして人類の悲願でもある。それは、「核兵器がない」「平和」という環境こそが、我々が安心して生活し、地域社会も発展し、そして良い医療が行える大前提である。核廃絶の運動とともに平和な世界を作る活動を、地域住民と共同して取り組み、健康な地域作りを広げることで、地域医療の基盤が強まっていくのではないだろうか。

3・11の未曾有の大震災そして人類が初めて直面している同時多発原発事故、メルトダウンし未だに収束のめどがみえず、福島県の深刻な被害と関東への影響そして三郷市などホットスポットと言われている広範囲への影響。対策が急がれるとともに、「核も、原発もない日本」が希求される昨今である。

原爆写真展



2003年から毎年開催している「原爆写真展」=次ページ参照



「イラク写真展」。運営に当たった大場文江副院長(左)らスタッフ

「原爆写真展」は、クリニックの2階などで、原水協の写真パネル「原爆と写真展」を展示、核廃絶の世論形成に力がある。何回、

見ても、胸をつまらせ、被爆者の苦難に思いをはせ、核廃絶の気持ちを引き起こしてくれる。引き続き、少しでも多くの方に、「人間の否定」となる原爆の悲惨さと「人間を取り戻す闘い」である被爆者の運動など、広く知って頂く事が重要である。

4年目には、「イラク写真展」も開催した。イラク戦争で米軍が大量に使用した「劣化ウラン弾」が、環境を汚染し、体内被曝で人体を蝕む被害を告発した写真を展示した。劣化ウラン弾が、核兵器である

か否か、そしてその放射線被害が、イラクの子供たちの癌が増加している真の原因なのか、論議がまだ続いている現在である。しかし、劣化ウラン弾の大量使用前後であきらかに癌や奇形が多発している事実から、劣化ウラン弾がその主犯人であることは間違いなくと思われ、低線量内部被爆による被害の実例として、とらえるべきと思われる。劣化ウラン弾の武器としての強力さ(=残酷さ)、そして後遺障害をもたらす非人間性を告発していくことの重要性と、放射線によると疑われる低線量内部被爆の被害の深刻さを、写真は物語っている。



「原爆写真展」に合わせ2004年から毎年開催している「被爆者の体験を聞く会」

被爆体験を聞く会 翌年からは、被爆者から体験を聞く会を同時に行ってきた。最初の語りべが、往診患者さんだったが、「原爆はなくさなければ、平和が大事」との車椅子からの訴えが、地域での平和運動の源流となっている。

早稲田の地での核廃絶運動と平和活動に、灯をつけてくれたのが、この“車椅子の語り部”パーキンソン病の被爆者だった。

70代後半の品の良い女性が、広島で被爆されていることを家族から知らされたのは、往診先のことだった。「被爆体験を皆に知らせて」と、往診2年目の夏に「語る会」をもったのである。車椅子生活の彼女は、パーキンソン症状に加え、多発性の疼痛、胸部苦悶など多愁訴で、家族と主治医を悩ませていたので、「語る会」登場には正直不安があった。だが、車椅子で登場した彼女は、円い背中を精一杯伸ばし、静かだがハリのある声で、広島での被爆体験をしっかりと語られたのである。凝縮された20分弱、原爆の悲惨さ、平和の大切さが、穏やかに語られ、聴衆の心に染み渡ったのであった。

その体験談をきっかけにして、毎年「原爆写真展」そして「被爆体験語る会」を行うようになったのである。被爆者の会のご協力で、語り部のお話を毎年聞かせていただいている。家族・兄弟の多くを亡くして子供ながらの手で茶毘に付したとの悲惨な体験を、初めて語ったと言う近隣市の被爆者、今年、子供ながらの記憶を、絵に描いて「語り部」をされている方など、聞くたびに深い悲しみと、原爆

の悲惨さを知り、地域の皆さんとともに核廃絶と平和擁護を一緒に考えあう場となっている。

地域諸団体と「平和のつどい」開催 9年目には、地域との連帯が進み、諸団体と協力した「平和のつどい」が開かれ、「三郷わせだ9条の会」発足に協力し、平和運動の輪が広がった。



「平和のつどい」は、原爆写真展と、被爆者の体験を聞く会、そして、ピアノコンサートや催しもの、諸団体によるバザー、売店、食堂など、交流の場として、子供さんたちへのお店などがもたれ、広い層の人たちの参加を得て、交流が広がってきている。「平和の願い」を、地域の人々、諸団体やサークルの協力の中で、確認しあい、地域にアピールし、『核兵器廃絶』の声を、さらに大きくしていきたい。

放射線から子供を守る運動 今年の3・11福島原発事故により、甚大な被害が福島県民を襲い、又広範囲な影響が関東北東部から南東部に広がった。5月11日、埼玉反核医師の会は、大場敏明と雪田慎二代表委員の連名で、「守れ子供たちを、原発で働く人びとを。そして日本を」の緊急声明を発した。

私の住む三郷市が「ミニホットスポット」のひとつで、関東の中では最も放射線量が高い一帯であることを知ったのは5月のことであった。以来、三郷市内の病院小児科部長やクリニックの小児科医などと協力して、6月4日に「放射線から子供を守る三郷連絡会」を結成し、市議会への陳情、父母たちが取り組んだ請願署名活動への協力、学習会、講演会などに取り組んだ。

そして、8月10日には「子どもたちの未来を守るために、三郷市への提言」(5項目の提言)を提出。9月1日には、市の主催で、講演会「放射線と健康」が開かれ、9月7日には、県下初の、三郷市放射能対策室が作られ、測定・除染・影響調査・情報収集などの業務を、おこなう事とし、保育所の庭の除染から取り組み出した。お母さん方や市民の運動が、市当局に本格的対策に乗り出させてきている。